

## 20 世紀前半ベトナム語の sự と bị の用法と文法化

鷺澤拓也

takuyawas@gmail.com

キーワード：ベトナム語 歴史言語学 文法機能語（虚詞） 文法化 書記言語形成  
名詞化 受身

### 要旨

ベトナム語で、過去 2 世紀間に文法化されたと考えられる語のうち、名詞化を表す sự と、受身を表す bị を取り上げ、これらは 20 世紀前半においても文法化の過程にあったことを述べる。

「こと」を表す名詞だった sự は、1920 年代の文学作品では、現代の名詞化用法の規則に当てはまらない用法が未だ多く見られる。本来「被る」を表す動詞である bị は、1920 年代の文学作品で既に、「bị+動詞」や「bị+動作主+動詞」による受身表現が多く用いられているが、現代には見られない用法も少なからず残っている。フランス語を中心とする西洋諸言語と接触し、ベトナム語が近代的な書記言語として成立していく中で、名詞化や受身の表現が固定化されていったという捉え方が可能である。

### 1. はじめに

孤立語であり語形変化や接辞のないベトナム語<sup>1</sup> では、文法の表示は語順と文法機能語によりなされる。Washizawa (2019) では、現代ベトナム語に見られる機能語のうち、của, sự, không, bị の 4 語は、18 世紀以降に内容語から文法化したと考えられるということを示した。具体的には、属格を表す của (もとは「財産」の意、非漢語) と名詞化を表す sự (もとは「こと」の意、「事」の字音) は 19 世紀末以降、否定を表す không (もとは「空(から)の」「むなし」の意、「空」の字音) と受身を表す bị (もとは「被る」の意、「被」の字音) は 18 世紀後半から 19 世紀前半に、文法化されたということを示した。これらの語がそれ以降、現代までに経た用法の変化の過程が課題となった。本稿ではそのうち sự と bị を取り上げ、20 世紀前半の用法を調べる。この 2 語を取り上げるのは、名詞化や受身といった重要な文法事項でありながらも文法化が比較的新しいことに加え、Washizawa (2019) や本稿 2.1 に示すように、現代語において独特の統語的特徴があることから、統計的手法によって文法化の過程

<sup>1</sup> オーストロアジア語族。基本語順は SVO、後置修飾。1 音節がほぼ 1 形態素となる。現代の正書法ではラテン文字で表記される。母音：a [a],[a:]; ă [a]; â [a]; e [e]; ê [e]; i, y [i]; o [o]; ô [o]; ơ [ə]; u [u]; ư [ư] 子音：b [b]~[β]; c, k, q(u) [k]; ch [tʃ]; d, gi [z]; đ [d]~[d̥]; g, gh [ɣ]; h [h]; kh [x]; l [l]; m [m]; n [n]; ng, ngh [ŋ]; nh [ɲ]; p [p]; ph [f]; r [z]~[ʒ]; s [s]~[ʃ]; t [t]; th [tʰ]; tr [tʃ]~[tʃ̃]; v [v]; x [s] 声調(調値)：a 44; ă 21; â 35; â 312; â 325(喉頭化を伴う); a 31(喉頭化を伴う) (川本 2011:1906-1913)。現代の正書法が正式に定められたのは 1945 年の独立以降だが、20 世紀前半のラテン文字表記も現代と大きくは変わらない。なお、20 世紀前半まで、漢字の組み合わせ・変形・転用により作られたベトナム固有の表語文字チュノム(字喃)もベトナム語の表記法として併用された。

の全体像を把握することが可能であると考えたためである。

Washizawa (2019) での集計の結果、sự は機能語のような用法を発達させるかのように見えつつ、従来の内容語としての用法もろとも、19 世紀には使用頻度を減らしていった。また bị は 19 世紀に受身として用いられ始めたが、19 世紀後半の段階でまだまだ使用頻度は低く、内容語としての用法の割合も高かった。

20 世紀に sự や bị の機能語としての用法が大多数を占めるようになるまで、どのような過程を経たのかを知る一環として、本論文では 20 世紀前半の sự と bị の用法を分析する。

## 2. Sự と bị との現代ベトナム語での用法

### 2.1. Sự

現代ベトナム語の辞典 (Hoàng Thị Tuyền Linh<sup>2</sup> 2011) によると、sự は「事 (việc)、話 (chuyện)」を表す名詞、また、活動・動作や性質を名詞化(事物化)する働きを持つ名詞である。前者の用法は、古風または慣用的なものが多く、現代では後者の用法が大多数を占める。同辞書で挙げられている例は、sự đau đớn 「苦痛」(đau đớn: 「痛ましい」)、sự cố gắng 「努力」(cố gắng: 「頑張る」) 等。

Nguyễn Thị Thuận (2003: 61) によると、名詞化のために、抽象的な意味をもつ名詞が、名詞化辞のようにたびたび使われるが、そのうち主に用いられるのは sự と việc の 2 つである。Sự は動詞(または形容詞)のみを名詞化するのに対し、việc は動詞句または節全体を名詞化する語であり、việc により名詞化される内容は sự によるものより具体的である。また、以下のような制約がある。

- ・ Sự の後には常に 2 音節以上<sup>3</sup>の動詞または形容詞が置かれる (Nguyễn Thị Thuận 2003: 53)<sup>4</sup>
- ・ “Sự + 動詞” の後に動詞の目的語を置く場合は前置詞が必要 (Nguyễn Thị Thuận 2003: 71)

(1) Kỳ vọng sự phát triển của kinh tế Việt Nam  
 祈望する 名詞化 発展させる ~の 経済 ベトナム

「ベトナム経済の発展を祈望する。」

(1') \*Kỳ vọng sự phát triển Ø kinh tế Việt Nam.

(2) Tôi tức giận anh ta.  
 私 怒る 彼

「私は彼を怒る」

<sup>2</sup> ベトナムの学術的慣習に従い、ベトナム人の著者名はフルネームで記す。

<sup>3</sup> ベトナム語では 1 音節の語は具体的、2 音節以上の語は抽象的な意味を持つ傾向がある。

<sup>4</sup> Sự sống 「命」(sống: 「生きる」) や sự chết 「死」(chết: 「死ぬ」) は、固定的な慣用表現として、例外。

- (2') sự tức giận đối với anh ta của tôi  
 名詞化 怒る ～に対して 彼 ～の 私  
 「彼に対する私の怒り」
- (2'')? sự tức giận của tôi đối với anh ta  
 名詞化 怒る ～の 私 ～に対して 彼
- (2''')\* sự tức giận anh ta của tôi  
 名詞化 怒る 彼 ～の 私

これらの制約は、việc と対照をなしている。すなわち、文の構造が複雑で、名詞化の明示により構造がよりわかりやすくなるような場合以外、việc は 2 音節以上の動詞すなわち抽象的な意味を持つ動詞の前に来ることは稀である (Nguyễn Thị Thuận 2003: 50)。<sup>5</sup> また、例文 (2) の「怒る」ような、状態や長期間にわたる行動は việc で名詞化できない (Nguyễn Thị Thuận 2003: 53)。“Việc + 動詞”の直後に“của + 名詞”「～の」を置くことはできない (Nguyễn Thị Thuận 2003: 61)。<sup>6</sup>

なお、文法機能語を使わない名詞化も可能であり、使う場合と意味の違いがある。<sup>7</sup> Nguyễn Thị Thuận (2003) は他に、動詞・形容詞・動詞句を名詞化する語として、cuộc, cái, nỗi, niềm, chuyện, trận, cơn, hiện tượng, vụ, chuyện を挙げ、それぞれの用法の違いを述べている。

## 2.2. Bị

Bị は現代ベトナム語において、喜ばしくない、または利益のない動作を主語が被ることを表す動詞とされる。(Hoàng Thị Tuyên Linh 2011)

- (3) Tôi bị ngã.  
 私 被る 倒れる  
 「私は倒れてしまった。」

- (4) Tôi bị ốm.  
 私 被る 病気だ  
 「私は病気です。」

<sup>5</sup> 2 音節動詞の前に việc が用いられる複雑な文の例：Việc đổi mới chính sách đầu tư của chính phủ đã được các đối tác nước ngoài đánh giá cao. “政府の投資政策刷新は外国のパートナーに高く評価された。” (đã の前までが主語)

<sup>6</sup> 例文 (1) 中の一部を việc を使って名詞化させる場合、việc phát triển kinh tế của Việt Nam “ベトナムの経済を発展させること”となる (Nguyễn Thị Thuận 2003: 61)。

<sup>7</sup> 例：Uống cà phê luôn luôn làm tôi mất ngủ. {uống: 飲む, cà phê: コーヒー, luôn luôn: いつも, làm: する・使役, tôi: 私, mất: 失う, ngủ: 眠る} “コーヒーを飲むといつも私は不眠になる。” / {Việc / \*Sự} uống cà phê làm tôi mất ngủ. “コーヒーを飲むことにより私は不眠になった。” (Nguyễn Thị Thuận 2003: 44)

このように、bị が用いられるのは必ずしも受身の場合に限らないが、主語が対象となる動作に使われる場合、いわゆる受身の文になるといえる。

- (5) Tôi bị đánh.  
私 被る 殴る  
「私は殴られた。」

この時、動作の前に動作主を置いて「(動作主) が…するのを被る」という文を作ることができる。英語やフランス語等との対照で「主語 + bị + 動作主 + 動詞」で受身の文となると説明されることが多いが、口語では実際この構文が用いられることは比較的少ない。

- (6) Nó bị bố đánh.  
彼 被る 父 殴る  
「彼は父に殴られた。」

なお、被害や迷惑でなく恩恵を被る受身の場合には được (本来の意味は「得る」) を用いて、bị と同様に動作等の前に置いて表現することができる。「主語 + được + 動作主 + 動詞」(「動作主が…するのを得る」) の構文は、bị の場合と同じく口語で用いられることが比較的少ない、恩恵を被る場合の受身文と説明されることが多い。

- (7) Nó được bố khen.  
彼 得る 父 褒める  
「彼は父に褒められた。」

また、別の受身構文として、「～によって」を表す前置詞 bởi を用いた、「主語 + bị / được + 動詞 + bởi + 動作主」という構文も、しばしば取り上げられる。<sup>8</sup>

- (8) Họ bị trói buộc bởi cách suy nghĩ cũ.  
彼ら 被る 縛る ～によって 方法 考える 古い  
「彼らは古い考え方に縛られている。」

- (9) Bức tranh này được vẽ bởi một họa sĩ nổi tiếng.  
類別詞 絵 この 得る 描く ～によって 一 画家 有名な  
「この絵はある有名な画家によって描かれた。」

<sup>8</sup> 五味 (2015: 73, 91)。

### 3. 分析対象文献

本稿では、20 世紀前半に書かれた近代文学の作品から、小説を中心に代表的なものを取り上げる。脚韻や平仄などの特殊な修辞技法が少ない散文であり、かつ、新聞や行政文書などよりは話されている言語に近いと考えられるからである。ベトナム語の語彙史の概説書である Vũ Đức Nghiệu (2011) で、ベトナム語の語彙史を把握するために有用な文献として挙げられている (同書 pp. 393, 396-397) 中から、選集の形でまとまっている等、データ化と分析がより容易に可能と思われる以下のものを取り上げた。(データのもとにしたのは近年再出版されたもの。それぞれの再出版年と出版社は本稿末尾の参考文献覧中に記した。)

- ・ Hồ Biểu Chánh 著の 3 編の長編小説 *Cay đắng mùi đời* (1923)、*Tình mộng* (1923)、*Nhân tình ấm lạnh* (1925)

- ・ Hoàng Ngọc Phách 選集より、長編小説 *Tổ Tâm* (1925)、短編小説 *Dây oan* (1941)、*Giọt lệ hồng lâu* (1941)、およびエッセイ *Thân thể và văn chương Cô Xuân Hương* (1928)。

- ・ Vũ Trọng Phụng 選集より、短編小説 *Chống nạng lên đường* (1931)、*Bà lão lừa* (1931)、*Một cái chết* (1931)、*Con người điêu trá* (1932)、*Bộ răng vàng* (1936)、*Hồ sẽ liú hồ liú sẽ sàng* (1936)、*Người có quyền* (1937)、*Cái ghen đàn ông* (1937)、*Lòng tự ái* (1937)、*Đi săn khi* (1937)、*Máu mé* (1937)、*Tự do* (1937)、*Lấy vợ xấu* (1937)、*Một con chó hay chim chuột* (1937)、*Một đồng bạc* (1939)、*Giương... tổng tiền* (1939)、*Ấn mừng* (1939)、*Bắt vịch* (1939)、長編小説 *Số đỏ* (1936)、*Giông tố* (1936)、およびルポルタージュ *Com thầy com cô* (1936)。

- ・ Nhật Linh と Khải Hưng 選集より、Nhật Linh の短編集 *Người quay tơ* (1927)、*Tối tăm* (1936)、*Hai buổi chiều vàng* (1937)、および長編小説 *Đôi bạn* (1938)、Khải Hưng の短編集 *Dọc đường gió bụi* (1932-35)、*Tiếng suối reo* (1932-35)、*Anh phải sống* (1937)、短編小説 *Linh hồn thi sĩ* (1934)、および長編小説 *Hồn bướm mơ tiên* (1933)。

作品中の総音節数を、著者と年代ごとにまとめると、以下の表ようになる。<sup>9</sup>

表 1. 著者・年代ごとの作品中の総音節数

	1923	1925	1927	1928	1931	1932	1933	1932-35	1934	1936	1937	1938	1939	1941	合計
Hồ Biểu Chánh	104,443	95,920													200,363
Hoàng Ngọc Phách		30,267		4,224										3,399	37,890
Vũ Trọng Phụng					12,482	3,322				175,269	23,282		10,441		224,796
Nhật Linh			15,546							21,423	18,044	47,984			102,997
Khải Hưng							21,705	31,038	2,160		12,358				67,261
合計	104,443	126,187	15,546	4,224	12,482	3,322	21,705	31,038	2,160	196,692	53,684	47,984	10,441	3,399	633,307

<sup>9</sup> Khải Hưng の 2 つの短編集には、「1932-35 年に書かれた短編小説」とのみ書かれ、各短編小説がいつ書かれたのかは記されていないため、それらをこの列に入れた。この期間内であっても、書かれた年が明記されている作品については、「1932」「1933」「1934」の列に入れた。

#### 4. 研究手法

上記の文献を OCR スキャンし、本文をデータ化する。VnCoreNLP<sup>10</sup> というベトナム語の自然言語処理ツールを使って品詞等をタグ付けし、**sự** と **bị** について、以下のように後続の語の条件を場合分けして、出現箇所を抽出する。

**Sự:**

- ① 直後に動詞・形容詞が置かれない
- ② 直後に1音節の動詞が置かれ、その動詞の直後に名詞も前置詞もない
- ③ 直後に1音節の動詞が置かれ、その動詞の直後に名詞が続く
- ④ 直後に1音節の動詞が置かれ、その動詞の直後に前置詞が続く
- ⑤ 直後に1音節の形容詞が置かれ、その形容詞の直後に名詞も前置詞もない
- ⑥ 直後に1音節の形容詞が置かれ、その形容詞の直後に名詞が続く
- ⑦ 直後に1音節の形容詞が置かれ、その形容詞の直後に前置詞が続く
- ⑧ 直後に2音節以上の動詞が置かれ、その動詞の直後に名詞も前置詞もない
- ⑨ 直後に2音節以上の動詞が置かれ、その動詞の直後に名詞が続く
- ⑩ 直後に2音節以上の動詞が置かれ、その動詞の直後に前置詞が続く
- ⑪ 直後に2音節以上の形容詞が置かれ、その形容詞の直後に名詞も前置詞もない
- ⑫ 直後に2音節以上の形容詞が置かれ、その形容詞の直後に名詞が続く
- ⑬ 直後に2音節以上の形容詞が置かれ、その形容詞の直後に前置詞が続く

**Bị:**

- ① 直後に形容詞が置かれる
- ② 直後に動詞が置かれ、その動詞の直後に “bởi” (「～によって」) が置かれない
- ③ 直後に動詞が置かれ、その動詞の直後に “bởi” が置かれる
- ④ 直後に名詞が置かれ、その名詞の直後に動詞が置かれない
- ⑤ 直後に名詞が置かれ、その名詞の直後に動詞が置かれ、その動詞の直後に “bởi” が置かれない
- ⑥ 直後に名詞が置かれ、その名詞の直後に動詞が置かれ、その動詞の直後に “bởi” が置かれる
- ⑦ 上記①～⑥以外の場合

ただ、ここでは直後の語の品詞で場合分けしたため、数語にわたる統語構造を自動的に分析して名詞句や動詞句を捉えるには至らなかった。**Bị** については頻度が少なかった例外的な場合について、統語構造を把握して手作業で分類し直し<sup>11</sup>、**sự** については直後の1語のみに焦点を当てて集計することにした。

<sup>10</sup> <https://www.aclweb.org/anthology/N18-5012/>

<sup>11</sup> **Bởi** を用いた受身表現で見つかったものは、1例のみだった (Khái Hưng (1932-35) *Độc đường gió bụi* 中、選集 408 頁 15 行目)。

## 5. 集計結果

4. のようにして得られた結果をまとめると、下の表のようになる。

表 2. 直後の語で分類した、年代ごとの *sy* の出現回数

	1923	1925	1927	1928	1931	1932	1933	1932-35	1934	1936	1937	1938	1939	1941	合計	
動詞・形容詞以外	20	29	5	4	0	3	12	25	4	108	15	1	5	0	231	
1音節	動詞	2	9	1	0	1	0	4	13	0	39	11	0	7	0	87
	形容詞	3	3	0	0	0	0	1	8	2	17	2	0	0	1	37
2音節	3	7	2	0	0	1	10	54	0	138	34	2	3	1	255	
以上	2	6	0	1	1	1	14	49	2	90	18	6	3	0	193	
合計	30	54	8	5	2	5	41	149	8	392	80	9	18	2	803	

4. の場合分けと対応させると、「動詞・形容詞以外」は①、「1音節」の「動詞」は②と③と④の合計、「1音節」の「形容詞」は⑤と⑥と⑦の合計、等となる。

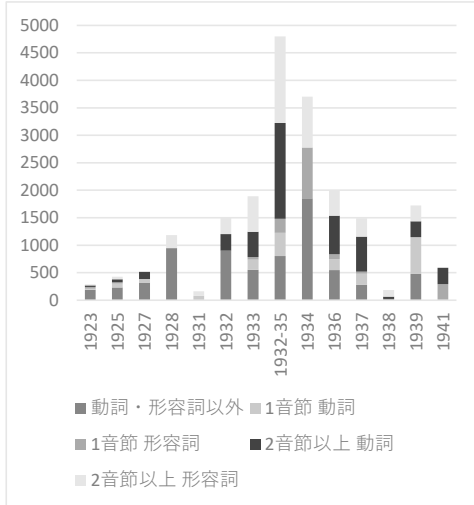
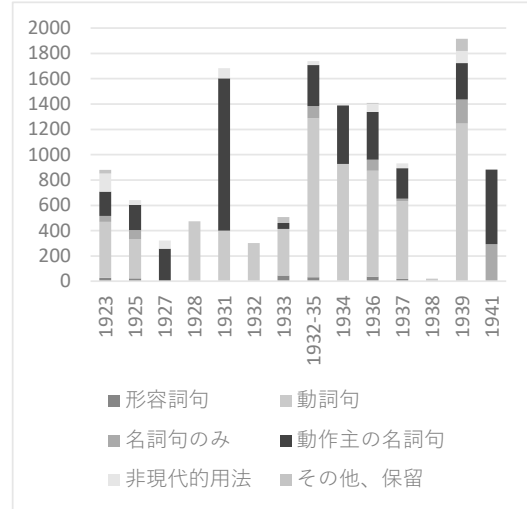
表 3. 後続の要素で分類した、年代ごとの *bi* の出現回数

	1923	1925	1927	1928	1931	1932	1933	1932-35	1934	1936	1937	1938	1939	1941	合計
形容詞句	3	3	0	0	0	0	1	1	0	7	1	0	0	0	16
動詞句	46	39	0	2	5	1	8	39	2	165	33	1	13	0	354
名詞句のみ ( <i>bi</i> が純粹動詞)	5	9	0	0	0	0	0	3	0	17	1	0	2	1	38
動作主の名詞句	20	25	4	0	15	0	1	10	1	74	13	0	3	2	168
非現代的用法	15	5	1	0	1	0	0	1	0	13	2	0	1	0	39
その他、保留	3	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	6
合計	92	81	5	2	21	1	11	54	3	277	50	1	20	3	621

「名詞句のみ」の場合、*bi* が「被る」という意味の純粹動詞となる。「動作主の名詞句」の場合は、2.2 の例文 (6) のような、「*bi* + 動作主 + 動詞」の受身構文ということである。4. の場合分けとの対応ではおよそ、「形容詞句」は①、「動詞句」は②と③、「名詞句のみ」は④、「動作主の名詞句」は⑤ (⑥は出現しなかった) だが、直後の名詞句が 1 語でない場合には、「*bi*(被る) + 目的語」の場合と、「*bi* + 動作主 + 動詞」の構文の場合が、④や⑤や⑦に分散して出てくるため、それらを手作業で分類し直した。「非現代的用法」については後述する。「その他、保留」は、セリフの途中で発言が中断された場合や、意味を把握できなかった箇所である。

ここで便宜的に、出現頻度を各年代の総音節数で平均化し、100 万倍<sup>12</sup>し、すなわち 100 万音節あたりの出現頻度に均して、グラフで表すと、次のようになる。

<sup>12</sup> 本稿で表示するデータとグラフのみを見れば、100 万倍までしなくてもよいように思われるかもしれないが、実際の計算の中では、10 万倍以下では、計算した値が 10 未満になるところが多く、分析しにくいところがあったため、

図1. 100万音節あたりの *sự* の出現頻度図2. 100万音節あたりの *bị* の出現頻度

これらの結果を、以下に分析していく。

## 6. 分析

### 6.1. *Sự* の用例分析

図1を見ると、全体の用例数が1932-35年を頂点にして、それ以前は増加、以降は減少という傾向にあるように見えるが、頻度が高い作品は *Khái Hưng* 著のものが多いところを見ると、作者ごとの文体の違いも原因の1つにあると考えられる。

一方で内訳を見ると、「動詞・形容詞以外」が後続する場合、これは指示詞が後続して「そのこと」のような意味で使われる場合が典型だが、1923年と1925年ではその割合が高いのに対して、1932-35年ではその約2倍ずつの頻度で、2音節以上の動詞や形容詞の前に *sự* が置かれている。もちろんこれも作者ごとの文体の違いという要因もあるかもしれないが、年代が進むにつれて増えるという傾向が見られるため、この間の時期、すなわち1920年代後半から1930年代前半に、本来の純粋な名詞としての用法から、現代のような名詞化の標識への文法化が進んだ可能性を考えることができる。

なお、*sự* の後に1音節の動詞が来る場合、「*sự yêu*」「愛すること／もの」「*sự ăn, sự uống*」「食すること、飲むこと」といった、現代ではあまり使われない用法がある一方、脚注4にも記した「*sự sống*」「命」のような現代に続く用法も多い。また、「*sự xảy ra*」「起こること」(*xảy* だけでも「起こる」だが、*ra*「出る」という方向詞を伴うことが多い)のように、1音節語の組み合わせと2音節語の境界にあるような語句が続いていることも多い。

2音節の動詞が続く場合でも、次の例文(10)のように、2.1で述べた現代語の規則に反して、前置詞なしで目的語が続いている場合も散見される。現代語ではこのような場合は *sự* ではなく *việc* を使うこととなる。



- (10) nhớ tới sự giải phóng con chim vành khuyên của tôi  
 思い出す ～に 名詞化 解放する 類別詞 スズメ ～の 私  
 「私のスズメを放したことを思い出す」

Khái Hưng (1932-35) *Đọc đường gió bụi* 中、選集 416 頁 14 行目

これらの用例から、*sự* が句単位での名詞化に使われていることがわかり、これは文法化の過程の中で、現代のような完全な語単位での名詞化用法を持つ前の段階にあることの表れであることを示唆している。

## 6.2. Bị の用例分析

本研究の範囲では、年代を通しての全体的な総頻度の傾向も、内訳の傾向も大きなものは見出せなかった。ただし、現代からすると不自然と感じられる可能性の高い表現（「非現代的用法」と分類）が 1923 年と 1925 年に相対的に頻繁に表れたのが、特筆すべき事項である。

例えば、例文 (11) では、*bị* に続くものが動作だけでなく「前日」といった要素も含み、事象を詳細まで説明したものを被っているという構造となる。「*bị* + 名詞 + 動詞」の構文ではあるが、ここでの「名詞」は動作主ではなく、動詞も他動詞ではなく、よって受身構文ではない。

- (11) bị ngày trước đi xa mệt mỏi  
 被る 日 前 行く 遠い 疲れた  
 「前日に遠い道を行って疲れている」

Hồ Biểu Chánh (1923) *Cay đắng mùi đời*, 163 頁 4 行目

また他には、*bị* の後に “*trời tối*” が続いている箇所がある。<sup>13</sup> *Trời* は「空」「天」、*tối* は「暗い」の意味だが、天候に関する表現で主語として用いられる。例えば、*Trời mưa*. : 雨が降る (*mưa*: 雨)、*Trời nóng*.: (気温が) 暑い (*nóng*: 暑い・熱い) (英語の “It rains.” や “It gets dark.” などの無意味の主語 *it* が用いられる表現と通じる)。しかし、これらの表現が *bị* の後に来るのは、現代語ではやや不自然と思われる。<sup>14</sup>

そして他に、“*bị chân tê liệt*” (*chân*: 足、*tê liệt*: 痺れる) といった表現もある。<sup>15</sup> 現代語で「足が痺れた」という場合は通常、“*chân bị tê liệt*” や “*bị tê chân*” (*tê* も *tê liệt* と同様「痺れる」の意) のように、動詞 (もしくは形容詞) *tê (liệt)* の直前に *bị* が置かれる。<sup>16</sup> これも上

<sup>13</sup> Hồ Biểu Chánh (1923) *Cay đắng mùi đời*, 205 頁 14 行目、207 頁 8 行目。また、同書 117 頁 4 行目には、“*bị trời lạnh*” (*lạnh*: 寒い、冷たい) も。

<sup>14</sup> これはあくまで筆者の感覚なので、母語話者への正確な調査が必要である。なお、“*bị trời tối*” を完全一致でウェブ検索すると、同作品の引用や、辞書での例文が当たるが、現代的な用法はほぼ見られない。

<sup>15</sup> Nhất Linh (1936) *Tối tăm*, 73 頁 25 行目。

<sup>16</sup> ウェブで “*bị chân tê*” を完全一致で検索すると、当たるのは文学作品の引用や辞書の例文が主である。

に挙げた例と同様、「*bi*+ 名詞 + 動詞」の構文だが受身ではなく、現代語と同様の用法といえるか疑問が持たれる用例である。

こういった例を通して、20世紀前半、特に1920年代は、*bi*の受身での用法への文法化の途上にあると考えることができる。

## 7. 結論と考察

20世紀前半、特に1920年代から1930年代に書かれたベトナム語の近代文学作品において、*sur*と*bi*がどのように使われているかを集計し、分析した。*Sur*は従来の名詞「こと」としての用法が依然として多く使われているものの、現代と同様の名詞化の用法も、特に1930年代の作品に多く見られる。一方でその中間にあたるような、現代の名詞化用法における規則が当てはまらない場合も多く見られ、*sur*がこの年代には文法化の過程にあった可能性を指摘できる。*Bi*も「被る」という意味の純粋な動詞としての用法が多く見られるものの、動作主を伴うもの、伴わないものともに受身の用法がかなり定着していると言える。ただし、1920年代を中心に、現代の用法と異なると思われるものも散見される。

名詞や動詞からの文法化なので、Hopper & Traugott (1993: 40-48, 94-129)の述べる、内容語から機能語へという方向性<sup>17</sup>や「再分析」の過程に合致し、Heine & Kuteva (2007)に書かれた文法化現象でも説明できる点もあることから、<sup>18</sup>ある程度の通言語性が認められる。

この時代は、フランス植民地統治下で、ベトナム語が正式な公用語ではなかったものの、ベトナム語のラテン文字表記が普及していった時であり、ベトナム語が近代的な書記言語として書かれることも多くなっていた。また一方で、知識人層を中心にフランス語を解する人も増え、ラテン文字表記によるベトナム語での執筆活動をする人々は多くが重なっていたといわれている。そのような中で、ベトナム語がフランス語から語彙や文法の面で様々な影響を受けつつ、行政や学術など多方面で書記言語として使われるために、語彙の拡充だけでなく、明示的な文法機能の表示方法を備えていったと考えることができる。名詞化や受身を明確に表現することは、そのような背景のもとでなされたと考えられる。<sup>19</sup>

今後の課題としては、*sur*に後続する統語構造の把握(4.に記した場合分け)、「非現代的用法」に分類した用例に対する現代の母語話者の感覚(不自然かどうか、古風と感ずるか等)の調査、*sur*や*bi*が漢語起源であるということ(それぞれ「事」と「被」)と書記言語形成と

<sup>17</sup> どのような要素からどのような要素に文法化するかということに関する通言語的な傾向。名詞・動詞・形容詞といった内容語から文法機能語へ、さらに進むと接語や接辞となる。

<sup>18</sup> 「被る」ことを表す動詞から受身への文法化が中国語(漢文)の「被」等の例示により記され(Heine & Kuteva 2007: 80-81)、名詞から、名詞化標識と厳密には違うが、補文標識への文法化が、日本語の「こと」等の例示により記されている(同書67頁)。

<sup>19</sup> Nguyễn Thị Thanh Xuân (2015: 203)によると、19世紀後半の文献の中で、形容詞を動作の様態を表すために使う際に「方法」を表す *cách* という語が前置して用いられており、これは現代語で“*một cách* + 形容詞”(「1つの～な方法で」)という言い方になるものの前段階で、フランス語の接尾辞 *-ment* を訳したものだとして説明されている。また、一般的に、現在国家等で公的に用いられている言語は、近代的な言語として確立される過程があったと指摘されており(Haugen 1966, 野村 2013)、非西洋語の場合、そこで西洋語の翻訳などからの影響を受けることも多い(柳父 2004)

の関連の考察、各著者の出身地や社会階層の違いによる方言差<sup>20</sup>の分析といったことが挙げられる。そして、分析対象の文献や語を増やすことが必要である。

## 参考文献

- 五味政信(2015)『五味版 学習者用ベトナム語辞典』東京：武蔵野大学出版会。
- Haugen, Einar (1966) Dialect, Language, Nation. *American Anthropologist*: 68(4), 922-935.
- Heine, Bernd and Tania Kuteva (2007) *The Genesis of Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Hồ, Biểu Chánh (1923, 2018 再出版) *Cay đắng mùi đời*. Hà Nội: Nhà xuất bản Hội Nhà văn; Công ty Văn hóa Đình Tì.
- Hồ, Biểu Chánh (1923, 2014 再出版) *Tinh mộng*. Thành phố Hồ Chí Minh: Nhà xuất bản Văn hóa – Văn nghệ Thành phố Hồ Chí Minh.
- Hồ, Biểu Chánh (1925, 2017 再出版) *Nhân tình ấm lạnh*. Thành phố Hồ Chí Minh: Nhà xuất bản Văn hóa – Văn nghệ Thành phố Hồ Chí Minh.
- Hoàng, Ngọc Phách 著, Nguyễn Huệ Chi 主編 (2018) *Tuyển tập Hoàng Ngọc Phách*. Hà Nội: Nhà xuất bản văn học; Công ty văn hóa Truyền thông Sống.
- Hoàng, Thị Tuyền Linh et. al. (2011) *Từ điển tiếng Việt* [ベトナム語辞典]. Hà Nội, Đà Nẵng: Nhà xuất bản Đà Nẵng, Trung tâm Từ điển học.
- Hopper, Paul J. & Elizabeth Closs Traugott (1993) *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 川本邦衛編 (2011)『詳解ベトナム語辞典』東京：大修館書店。
- Nguyễn, Thị Thanh Xuân (2015) *Chuyến đi Bắc Kỳ năm Ất Hợi và Thầy Lazarô Phiền*, đặc điểm văn bản và những đóng góp vào sự phát triển của chữ-văn Quốc ngữ nửa cuối thế kỷ XIX [『乙癸年北圻訪問』と『ラザロ・フィエン先生』、文献的特徴と19世紀後半のクオックグー発展への貢献]. *Tạp chí Phát triển Khoa học và Công nghệ* 5X: 200-208.
- Nguyễn, Thị Thuận (2003) *Danh hóa trong tiếng Việt hiện đại* [現代ベトナム語の名詞句]. Luận án tiến sĩ Ngữ văn [文学博士論文], Trường Đại học Khoa học Xã hội và Nhân văn, Đại học Quốc gia Hà Nội.
- Nhất Linh & Khái Hưng 著, Đặng Thị Hà 編 (2018) *Tuyển tập Nhất Linh – Khái Hưng*. Nhà xuất bản văn học.
- 野村剛史(2013)『日本語スタンダードの歴史:ミヤコ言葉から言文一致まで』東京: 岩波書店。
- Vũ, Đức Nghiệu (2011) *Lược khảo lịch sử từ vựng tiếng Việt* [ベトナム語語彙史略考]. Hà Nội: Nhà xuất bản Giáo dục Việt Nam.
- Vũ, Trọng Phụng 著, Nguyễn Phương Thùy 編 (2018) *Tuyển tập Vũ Trọng Phụng*. Hà Nội: Nhà xuất bản Văn học.
- 柳父章 (2004)『近代日本語の思想—翻訳文体成立事情』東京: 法政大学出版局。

<sup>20</sup> Hồ Biểu Chánh は南部出身で、再出版版の中の解説でも、南部の方言の表れが指摘されている。

本研究は、JSPS 科研費 19K23047「近代的書記言語の形成過程の解明：ベトナム語の虚詞と文法史的变化を通して」および 21K13005「言語の『近代化』過程の解明：ベトナム語の文法史を通して」の助成により可能となりました。感謝申し上げます。

英文要旨の校正は、Enago (www.enago.jp) が実施。併せて感謝致します。

## Grammaticalization of *Sr* and *Bi* in Early 20th Century Vietnamese

Takuya WASHIZAWA  
takuyawas@gmail.com

**Keywords:** Vietnamese, historical linguistics, grammatical words (function words, empty words), grammaticalization, formation of written language, nominalization, passive

### Abstract

Vietnamese contains several words that became grammaticalized within the last 200 years. Among these, we focus on two words, the nominalizer *sr* and passive marker *bi*, to clarify that they were undergoing grammaticalization in the early 20th century. *Sr* was originally a noun meaning ‘thing’ or ‘matter,’ and in the 1920s, it still had usages that did not follow the rules of its contemporary function as a nominalizer. *Bi*, originally a verb meaning ‘to suffer,’ was already frequently used in the passive constructions “*bi* + verb” and “*bi* + agent + verb” in literary works of the 1920s; however, it also showed considerable differences in usages from those of today. These examples demonstrate that expressions of nominalization and passive voice became fixed in Vietnamese through its contact with Western languages, notably French, and Vietnamese developed as a modern written language with those expressions.

(わしざわ・たくや 神田外語大学)